足羽川用水（あすわがわようすい）

・足羽川用水は福井市南東部にある足羽川頭首工より取水し、1,997ha の広大な農地をかんがいする幹線水路の総称で、７つの幹線用水[*1] 22km からなる。

・この地域のかんがいは奈良時代に開かれた荘園内の原始的な水路であると考えられているが、ほぼ現在の形に整備されたのは江戸時代宝永年間[*2]（1710 年頃）。

・この時、複数の用水系統を統合して運用管理する、当時としては珍しい合口（ごうぐち）のための堰など[*3]を築くとともに、水路の分水地点に定石[*4]（じょうせき）を布設し水争いを緩和した。

・足羽川用水には徳光大用水江幅相改証文帳[*5]が残されており、当時の測量技術や設計水準の高さを伺い知ることができる。

・足羽川用水はこれまで幾多の災害[*6]に見舞われてきており、その都度、住民主導で堰堤や水路の補修・改修を行っている。

・現在は、幹線用水路を管理する７土地改良区[*7]からなる足羽川堰堤土地改良区連合が適切に施設を管理し安定した用水を農地へ供給している。

・本用水は、農業用水だけでなく、当地域の住民の生活に密着した用水でもあり、徳光用水（徳光下江用水路）沿いの街並みと調和した街道[*8]や、酒生用水を取り入れたビオトープ[*9]整備など、農業用水を活かした地域活性化の取組みも盛ん。

・平成 18 年に農林水産省の疏水百選[*10]に選定されている。

＊１　＜左岸＞徳光用水、六条用水、木田用水、社江守用水、足羽四ヶ用水、足羽三ヶ用水
　　＜右岸＞酒生（さこう）用水

＊２　元禄元年（1988 年）から正徳３年（1713 年）まで福井藩用水奉行を務めた戸田弥次兵衛英房公により整備された。

＊３　木工沈床による堰（通称「五本錠（ごほんじょう）」）の建設や、取水口、幹線水路の大改修も行われた。

＊４　水路底の掘削による過剰な取水を防ぐために、分水地点に強固な石で囲ったもの（参考図 1）。用水の配分を明確にすることで水争いが緩和された。

＊５　宝永７年に作製された、水路幅員や分水量を記載した古文書（写真 1）。現在の用水の幅員も本帳に記載のものと殆ど変っておらず、明治九年の字現図の作製も本帳に基づいているなど、当時の測量技術や設計水準の高さを伺い知ることができる。

＊６　記録として残っている災害として、古くは文化４年（1807 年）の大水害により取水口や幹線水

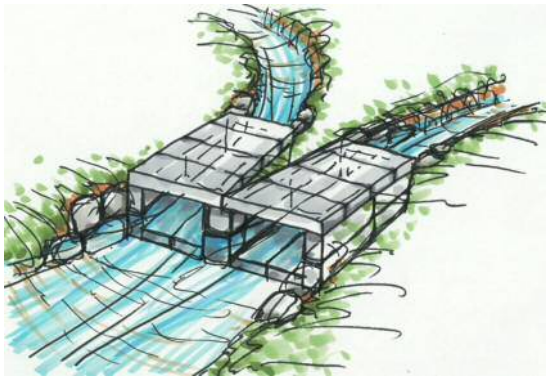
路が損壊した。その復旧事業は文政の大改修事業と言われ、関係 27 村により文政 9 年（1826 年）から 30 年の月日を費やされている。
それ以降も 1896 年の堰堤の決壊や 1899 年の取水口の流出など災害が続くが、1948 年の大地震による壊滅的な被害を契機に近代的な頭首工が建設され、更なる合口が図られた。

＊ 7　徳光用水土地改良区、六条用水土地改良区、木田用水土地改良区、社江守土地改良区、足羽四ヶ用水土地改良区、足羽三ヶ土地改良区、酒生用水土地改良区

＊ 8　用水沿いの街並みと調和した街道は東郷街道と呼ばれ、戦国時代には槇山城の城下町として、江戸時代には大野藩への参勤交代の道中の宿場町として栄え、その中央を流れる用水は、「堂田川（どうでんがわ）」の愛称で、川沿いの空間と共に人々に親しまれている。（写真 2）
司馬遼太郎著「街道をゆく」にも、～集落は道路の両側に軒を並べており、その道路の中央を、幅広い溝川が、走るように流れている。水は浅く、そのまますくって飲めそうなほどに澄んでいた～と紹介されている。

＊ 9　土地改良区や小学校、地域住民が連携し、小学校校庭脇を流れる酒生用水を引き込んだ親水用水路や池などのビオトープを整備。「酒生わいわいトープ」（写真 3）として、地域の子供たちが水や緑に親しむ拠点として活用されている。

*10　農林水産省が日本の農業を支えてきた代表的な用水を選定したもので、足羽川用水は「農業・地域振興」「歴史・文化・伝統」「環境・景観」「地域コミュニティの形成」の分野で評価され、平成 18 年に疏水百選に選定されている。



参考図 1
分水地点に配置された定石（伝聞による想像図）

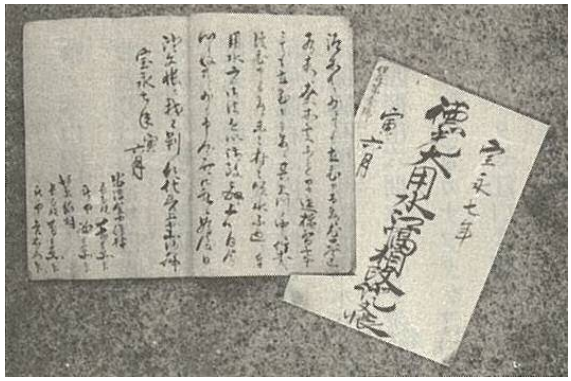


写真 1
徳光大用水江幅相改証文帳

写真 2
両側の街道とともに用水が流れる街並み

写真 3
酒生わいわいトープ